

陳士鐸『外經微言』（翻訳）

中醫クリニック・コタカ 小高 修司

『辨證録』（1748 年刊）などの著書で知られる陳士鐸（1627-1707）は、その独特の医学理論に基づく著明な医師として知られている。特に五行学説の相生相克理論を基本とする弁証には瞠目すべきものがある。そこには通常考えられているものとは異なる理論で構築されたものがあるようである。このたび「火論」を再考せんとし、文献を渉猟している過程で、改めて彼の『外經微言』（1816 年刊）⁽¹⁾を読み、その理論の独自性に興味を持ち、此処にその抄訳を思い立った次第である。本書は現在天津市図書館に蔵されている清抄本が唯一の伝本である。巻首に「岐伯天師伝 山陰陳士鐸号遠公又号朱華子述」、書末に「嘉慶二十年静楽堂書」とあるという（『陳士鐸医学全書』校注説明より）。

その論の一部を言えば、

- 1, 土生金には土中の微火が必要であるが、それが烈火だと逆に肺金を克してしまう。
- 2, 肝鬱なら肝火を生じるということは周知であるが、それは肝中にも火が蔵されているからである。腎水が不足すると肝中の火が壮んになり、これが心火を一層煽ったり、肺金を逆に侮し頑金としてしまう。

というように、通常の五行相生相克理論とは異なった論が展開されている。一部の内容には十分理解できない箇所も見られるが、可及的に理解が及ぶように註釈などを付した。諸兄弟が多少でも五行理論に新たな視点を加えられるとすれば望外の喜びである。

なお翻訳の順は原文の並びとは換えた。

肝木篇

少師問う「肝は木に属し、木は水がなければ養われません。故に腎は肝の母です。腎衰えれば肝も旺んになりません。肝木が虚するのは皆な腎水が涸れるからです。然るに肝木の虚が腎水の衰に依らざるものがあるは何故でしょうか？」

岐伯答えて「それは肝木自身が鬱の場合でしょう。木は疏泄を喜ぶもので、風寒の邪にあってこれを払いのけることができても、肝は そのたびごと 輒 のびやか に気が鬱して 舒 でなくなりますし、而も肝鬱は必ず脾胃を克してしまいます。土を制することが強力だと、木気も自ずから傷つき、勢い腎水に涸れを求めることとなりますが、水が木を生じて鬱気が解していなければ、反って横じて土を克することを助けることになってしまいます。土は水の助けを怒り、転じて水を克する（小高注：土克水）ようになるので、肝は腎の益を受けることができなくなり、腎も土の損（土克水）を受けることになり、病を受けないものがなくなってしまいます。腎が既に病んでしまえば、肝木の枯れるのを滋しようがありません。肝は水の養いが無くなれば、その鬱は更に甚だしくなり、ますます土を克するはめになり、脾胃は傷つき、気の轉輸が難しくなり、必ず救いを（小高注：母である）心火に求めます。ところが肝木は鬱により全く心を顧みない（小高注：木生火が不十分）ので、心は化源を失っていますから、心火は土を生じることができる筈がありません。心は、子である土も傷つき、

母である肝の過逆の咎を受ける状況になっており、(小高注：火刑金)による肺金の調整ができない状況で)反って肺金が肝木を制さないことを、(小高注：心が)嘖り、その(心)火を出して肺を克してしまい、肺は土気による生(小高注：土生金)も無く、肺金は存続も困難になり、反って肝木の逆を受け、もうどうにもならなくなってしまいます。」

少師問う「木気に金の抑制が無く、木気は舒になる状況が示唆されるのに、何で鬱となるのですか？」

岐伯答えて「木の性は曲直であり、必ず金の抑制を受けて成っております。いま金が弱く木が強い状況では、肝は畏れること寡く、勝手気儘になってしまいます。土が克する可能性もなく、水が養う可能性もなく、火が助ける可能性もなければ、是に於いて木は空しく焚かれるばかりとなりましょう。此処に木は金の抑制無くしていよいよ鬱となるのです。これが肝を治するには先ず解鬱を先にすべき所以であり、鬱を解せば肝気は自ずから平らかとなり土を克すこともなくなります。土は木の克が無くなれば、自ずと脾胃の気は易しく昇騰し、腎水を克することも忘れ、転じて肺金を生じるようになるでしょう。肺金は脾胃二土の気を受けて金気も旺んとなり、静粛に行り、腎水も匱乏の懼れも無くなり、且つ金が強くなり木を抑制しますから肝気も平らかになります。」

少師問う「肝気が平らかでなければ、直ちにこれを折ってもよろしいでしょうか？」

岐伯答えて「肝気が最も悪むものは鬱です。その次は平らかならざる事で、平らかならざる事の極みが鬱の極みになります。故に平肝とは解鬱と同じです。」

少師問う「その理由は？」

岐伯答えて「肝気平らかならざるは、肝中の火が過旺です。肝火過旺は肝木の塞に依ります。外は閉じていても内は焚えており、土を煉する気でなければ、心血を耗じるでしょう。火旺んは心の喜ぶところですが、温火は心を生じますが、烈火は心を逼塞させます。火の勢いが盛んの極みの時は暫く寒涼薬で肝火を瀉することも良いでしょう。鬱の極みには舒泄して平肝することもした方がよいでしょう。」

少師言う「善く解りました」と。

陳士鐸言う「木は鬱ならざれば損せず。肝木の鬱とはこれを逆するの謂いなり。人よく鬱を解さば、木はその平を得て何の鬱か有らん。」

心火篇

少師言う「心火は君火と言いますが、静を宜しとして動を宜しとしないのですか？」

岐伯答えて「君主は無為ですが、心を君火と為せば有為を可とすることになってしまいますか？君主が有為であれば民の福を生むことはできません。心静かならば火も息み、心動けば火も炎上します。息ならば脾胃土もその益を受けるし、炎上すれば(火生土である筈の)脾胃も災いを受けます。」

少師言う「どういう意味ですか？」

岐伯答えて「脾胃の土は温火の養を喜びますが、烈火の逼を悪みます。温火の養い有れば土に生氣が生まれ活土となりますが、烈火の逼により土は死気を有すことになり、焦土となります。焦火が何で金を生みましようか。肺金が乾燥すれば、必ず腎水に濟いを求めま

すから、腎水は不足していてもこれを済みます。」

少師言う「本来腎水とは心火を済うものであって、土を済うようなことが有ればどうなるのでしょうか？」

岐伯答えて「人の腎水は元来有余ではありません。心火が大いに旺んなとき、火を済おうと切（な気持ち）であっても、火気に煉されることを畏れないでしょうか？やはり火炎は避け心中に上昇しないようにするでしょう。心に水の済いが無ければ心火は更に烈しくなり、肺を克すること甚だしくなってしまいます。肺は火刑を畏れる余り、腎子に救いを求めましょう。しかし腎には救いたくても(余分な)水は無いのですが、肺母が凌煉されるのを忍ぶことができず、腎中に所有する分を出さざるを得なくなりましょう。国を傾けて助けることとなります。こうして水火が共に騰り、上焦に昇り心と戦うこととなります。心は無水のため肺を克し、水が心を済えないのを見て、火（ママ、腎水中の命火か？）が来て肺を救おうとしても、その水を取り転じて火と合してしまいますから、火勢は更に旺んになり、遂に肺は腎水の益を受けられず、反って腎火の虐を受ける羽目になってしまいます。かかるときに肝経の木は肺金が大いに弱まっているのを見て、(金刑木がないので)また火を出して心を焚いてしまいます。腎母を助けると称するものの、実は肺の仇を報じ刃を加えることであるのは明らかです。」

少師聞く「どう解決するのでしょうか？」

岐伯答えて「心火も動きが極まれば、その心を安んじ火も息むのです。」

少師問う「寒涼(薬)を用いて直ちにその火を折ってはどうか？」

岐伯答えて「寒涼も暫くなら用いても良いでしょうが、長く用いてはいけません。」

少師問う「何故ですか？」

岐伯答えて「心火は必ず腎水を得て済するものです。滋腎は心を安らげるので、心火は長く静かでいられます。腎を舍し心を安らげれば心火は元のように動きます。」

少師問う「水火が相克すれば心腎の水火はどう交わり済するのですか？」

岐伯答えて「水は同じではありません。腎中の邪水は最も心火を克し、腎中の真水は最も心火を養います。心中の液とは腎内の真水のことです。腎の真水が旺んならば心火も安んじられますが、腎の真水が衰えれば心火も沸いてしまいます。これを以て心腎が交われば水火既済し、心腎が開けば水火未済となります。」

少師問う「心は上に在り、腎は下に在ります。地位が異なるのにどう交わるのですか？」

岐伯答えて「心腎の交わりは胞胎がこれを導くと言われますが、実は肝木がこれを介するのです。肝木の気が通っていれば腎には阻隔するものではありませんが、肝木の気が鬱すれば心腎も閉塞してしまいます。」

少師問う「然らば肝木を養うものは何ですか？」

岐伯答えて「腎水は肝木の母でありますから、補腎すれば通肝することとなります。木は水がなければ旺んになれませんし、火も木がなければ生まれません。心液が枯れないようにするには肝血が常に足りていることが必要ですし、肝血が不足しないためには腎水が常に満ちていることです。肝木を補うためには腎水を補うのを忘れないことです。」

少師言う「善く解りました」と。

陳士鐸言う「心火は君火である。君心は有形の火であり、水を以て折るべし。腎中の火は

無形の火と為すに若かず。無形の火は水を以て養うべし。火の有形無形を知り、虚火実火を明らかにすべし。

脾土篇

少師問う「脾は湿土です。土は火から生じます。火は脾土の父母と為りますか？」

岐伯答えて「脾土の父母は一火に止まりません。心経の君火、包絡三焦命門の相火、皆なこれを生じます。しかし君火が脾土を生じるは甚だ疏であって、相火の脾土を生じるのは甚だ切です。相火の中でも命門の火が最も関係が深いのです。」

少師問う「何故ですか？」

岐伯答えて「命門の盛衰は脾土の盛衰なのです。命門が生絶すれば、脾土も生絶します。まさに命門は脾土の父母であり、死生に関わり、他の火が旺んであるか微すかであるかよりも、有るか無いかが問題になります。」

少師問う「命門の火が旺んすぎれば、多くは脾土が宜しくなくなるのは何故ですか？」

岐伯答えて「火が少なれば土が湿っており、発生の機は無いのですが、火が多くて土が乾けば、燥裂の害があります。脾は湿土であり、土中に水があり、(一方)命門は水中の火ですから、火が水中に蔵われています。つまり火は既済の火であり、自ずから亢焚の過ちを来すことはなく、脾土と相宜して、共に盛衰生絶するのです。もし火が旺んに過ぎるとすれば、これは火が水にたいして旺んなのであり、水不足を以て火を済します。つまり未済の火なのです。火は旺んのように見えて実は衰えており、これは真に旺んな状態ではなく、仮の旺んなのです。脾土とは相宜せず、脾を生むことができないようであるのではなく、転じて能く土を消耗する生氣となります。脾土に生氣が無ければ地は赤く干枯してしまい、精微を化し各臓腑を潤そうとしても難くなるでしょう。且つ火気は上炎し三焦包絡の火と上に直衝して、心火と相合し、火はますます旺んとなり、土は一層消耗し、焦火と為らざるを得ないでしょう。」

少師問う「焦土は能く肺金を生まないのですか？」

岐伯答えて「肺金すくは土からでなければ生まれませんが、いま土が焦土となっておりまして、中に潤沢の気が鮮なく、金を生むことはできないでしょう。金を生じられないので肺に禍が起こりましょう。肺に土気の生が乏しければ、また火気の逼塞が多くなり、金弱にして木強になるは必至でしょう。木強ならば土を浚い、土が破れ更に金を生むことが難しくなります。肺金が絶えれば腎水もまた絶えてしまいます。水絶えれば木を養えず木枯れて自ずから焚えてしまい、ますます火焰を増やすことになり、土は一層乾燥します。」

少師問う「どの経を治してこれを救えばよいのですか？」

岐伯答えて「(問題は)火の有余と水の不足です。水を補えば火は自ずと息みます。しかし徒いたずらに補水しても水はたやすくやす生じません。肺金の気を補うことで水は化源を有することになりますからわずらうことはありません。腎は水を得て以て火を制します。つまり水火相濟です。火に偏旺の害を無くすためにも先ず補水を行うべきです。」

少師言う「善く解りました」と。

陳士鐸言う「脾土と胃土は同生せず、脾土と胃土の生は同じからず。脾土を生じるのは必

ず^{すべから}須く心であり、胃土を生じるのは必ず須く包絡である。心は君火であり、包絡は相火であり、二火共に須く補腎すべきで、水を以て火を生じさせねばならない。

肺金篇

少師問う「肺は金で、脾胃は土といいます。土は金を生じますが、時に金を生じられないことがあるのは何故ですか？」

岐伯答えて「脾胃の土が旺んならば肺金も強く、脾胃の土が衰えれば肺金も弱い、なんの疑いもないことです。ですが脾胃の気が大いに旺んなのに、反って肺金が喜ばないことがあるのは、土中の火気が盛んすぎる場合です。土は肺金の母ですが、火は肺金の賊ですから、(相)生である筈が(相)克に変じてしまうのです。嗚呼、宜^{むべ}なるかな(もつともだ)。」少師が言う「金は火が克するのを畏れます。ですから火を避けるべきなのに、何でまた火に親しむのですか？」

岐伯答えて「近火に会えば肺の金気の柔らかいものは必ず銷けてしまいますし、離火ならば金気の頑ななものは必ず折れてしまいます。ですから肺を通薫するには微火を貴ぶべきです。土中に火がなければ肺金の気を生じることはできない(小高注：土生金には微火が必要)のですが、土中に火が多すぎても肺金の気を生じることはできないのです。烈火は肺の畏れるところであり、微火を肺は喜ぶのです。」

少師公言う「善く解りました。では金木の生克を教えてください。」

岐伯答えて「肺金は肝木の旺んな状態を制するのが理です。ですが肝中に火が盛んだと、金が火炎を受け肺が清肅の令を失ってしまいます(小高注：木火刑金)。火を避ける暇がないのに、敢えて肝木を制するのでしょうか？木気が空虚ならば、肺金の刑するのを畏れましょう。況や金が火制を受けていれば肺金の気は必ず衰えており、(克されるべき)肝木の火はいよいよ旺んとなり、勢いは必ず横行して忌むことなく、脾胃の土を侵伐することになります。いわゆる子(小高注：肺)の弱さを欺して、母(小高注：心)の強きを凌ぐのです。肺の母屋(小高注：脾胃)は敵(小高注：肝火)を受けつつも、木賊の強横を御し、ここに能く子である金の困窮を顧みるのです。肺は化源を失すれば、益々弱さを加えます。肺が弱ければ、腎水を下生することは難しくなり、金が水を生んでくれなければ、火を制することはできません。上焦の火が焚焼することだけを論じてはいけません。中焦の火もまたこれに随って更に熾んとなり、甚だしくは下焦の火もまた水を挟み沸騰するようになります。」

少師が聞く「何故肺金は火を召すのですか？」

岐伯答えて「肺金は嬌臟であり、各臟腑の上に位居します。火の性は上炎し、発して已みません。発すれば諸火がこれに応じるので、肺が独り厥害を受ける羽目になります。」

少師が聞く「肺が嬌臟だから諸火の威逼を禁じられないのですか？金破れれば鳴かず、断じて難は免れなければなりません、どう対処すればよいのでしょうか？」

岐伯答えて「子の腎水に頼り救って貰うことです。これは肺腎が相親しむことによりますが、更に倍するのは土金の相愛によって土が金を生むことも(利用する)ことです。金は土を生み難いのですが、肺は腎を生み、また腎も能く肺を生みます。昼夜の間、肺腎の気はかれこれ往来し相通じ相益するのです。」

少師が言う「金は水を得て炎を解するのですが、時に火を畏れない金があるのは何故ですか。どうか教えてください。」

岐伯答えて「この論はその変です。」

少師言う「もっと詳しくお話し下さい。」

岐伯答えて「火が金を煉するのは烈火です。火気が微ならば何で金を煉しましょうか。火を畏れることもなく、むしろ火を侮るのです。火が金を制し難いのは、金気が日に旺となり、肺が頑金となり、剛過ぎて犯すことができないからです。肅殺の気が必ず来りて木を伐れば、肝は金刑を受けることとなりますから、火を生じ難くくなり、(結局は)火勢が衰えるので寒と為り、火を畏れるに足らなくなります。しかるに(心)火が寒に過ぎれば、温気無くして土を生じることになり、土はまた何を以て金を生じるでしょうか。(心)火の寒が久しければ金もまた寒となります。」

少師言う「善く解りました。金は化して水となるのに、水が木を生じないのは何故ですか？」

岐伯答えて「水が木を生じられないとき、金が反って木を生じることになるのでしょうか？水が木を生じないのは、火が融かした水を金が受けるからです。真の水は木を生じてこれを融化しますから、水が木を克することになります。」

少師言う「善く解りました」と。

陳士鐸言う「肺が燥かなければ頑金には成らないし、肺に湿が過ぎれば柔金には成らない。肺中に火があるからである。肺が火を得れば金の益、肺が火を失えば金の損、故に金中に火がないのも火があり(過ぎる)のもダメなのだ。水火が旺んでなければ、金は反ってその宣を得るのだ。金の過旺のみを考えてはいけない。」

腎水篇

少師問う「腎水の義を教えてください。」

岐伯答えて「腎は水に属し先天の真水を言います。水は金より生じますので、肺金は腎の母となります。肺が腎水を生じられなくなると、必ず脾土の気が燻蒸します。肺は生化の源です。」

少師問う「土は水を克すると言うのに、どうして水を生むのですか？」

岐伯答えて「土が金を生むことに貪欲ならば、水を克することを全く忘れてしまうのです。」

少師問う「金は水を生むと言うのに、水が金を養うとはどういう事ですか？」

岐伯答えて「腎水は肺金がなければ生まれません。肺金は腎水がなければ潤いませぬ。肺は上焦に居りますので、諸臟腑の火が咸來て相逼します。もし腎水が灌注がなければ肺金は忽ち化してしまうでしょう。腎肺二経の子母関係は最も深いのです。交わらなければ相互に生じることなく、相互に養うこともない。補腎は肺を益することになり、補肺は必ず腎を潤すこととなります。始めに既済して功成るのです。」

少師問う「腎は肺の生を得るのに、肺の損を得て何で各臟腑を養えるのですか？」

岐伯答えて「腎は肺と交わり、肺は益して腎を生じます。腎は生化の源を有しますので、山の麓の泉は滾々とわき出て竭きることがありません。腎が既に優れて渥ければ、その水

を分け肝を生じます。肝木の中には本来火が蔵されており、水が有れば木(肝)は心をも生じます。水が無ければ火が木を焚いてしまいます。ですから木は水の済を得て、自ずから能く養うことができるのです。木は水で養われ、木に和平の気があれば、土を克することもなく、脾胃もその昇発の性を遂げることができるのです。心火が躁動しても、水が火の炎上を畏れず、上を潤し心を済するのです。」

少師問う「水が心(火)を潤すのは、もとより是が水火の既済ですが、ただ火炎を恐れれば水が来て済しなくなるのではないですか。」

岐伯答えて「水が心(火)を潤さなければ、木も水で養えないでしょう。水が木を養わなければ肝は必ず乾燥してしまい、火を発して木が焚かれ、(結局は木乗土により)脾胃の液が煉き尽きてしまい、肺金が土を救うこともできなくなるでしょう。何とか腎中に水を生じるようにさせるべきです。水が涸れば肝は益々燥いてしまいます。腎が癭(=水がしたたり落ちること)無くして肝を養ったとして、どうして余波が心に濯ぐことがあるでしょうか。肝木はいよいよ横じ、心火はいよいよ炎上するので、腎水は焚かれるのを恐れ、結果として心を済せなくなります。これは腎衰の結果であって、いわゆる腎旺の時ではありません。」

少師問う「腎が衰えて心を済せないといいますが、心だけが損を受けるのですか？」

岐伯答えて「心を水が養ってくれなければ、心君は安んぜず、肺金にその怒りを及ぼし、ついにはその火が肺に及び逼塞させてしまいます。肺金は最も火炎を畏れますから、その熱を腎に移してしまい、結果として腎の水が竭きてしまうのです。水中の火も依るべがなくなったところで心火を得れば、翕然として木を昇り、変化して龍雷となります。下焦より中焦に騰り、中焦より上焦に騰り、どうにも止まらなくなるのです。五臓七腑が等しくこの害を受け、心も受けるのです。」

少師問う「その火害はどんなに酷いのですか？」

岐伯答えて「火が多いから害を為すのではなく、水が少ないからなのです。五臓には臓火が有り、七腑には腑火がありますが、火がここに至れば、同じ気が親しむように、その勢いはたやすく旺んとなります。異なる所は水がこれを済することです。水が腎臓のみにあることになれば、水中に火がまたもあることになり、水の不足は敵である火の有余となり、これが腎臓には補があって瀉が無い所以になります。」

少師問う「各臓腑は皆な水を資とし、水に爰って火を畏れるのに、何で多くは火を助け焰を増やすのですか？」

岐伯答えて「水は少なく火は多いので、いったん火が発すれば、ただ火を恐れ水を消耗し、ついには水を顧み、反って水を害することを誰が知っていますか。ここに禍が愛を生み、水を悪むのではなく火を愛することになるのです。」

少師問う「火多くして水少ないのは、南方の火を瀉せば、北方の水を補うことにはなりませんか？」

岐伯答えて「水火はまた相根です。水無ければ火は烈し、火が無ければ水は寒えます。火が烈せば陰は虧け、水寒えれば陽が消えます。陰陽両に平らかならば、水火は必ず既済します。」

少師問う「水火既済すれば、ただ土の侵犯を畏れないことになりますか？」

岐伯答えて「土は能く水を克しますし、また土は能く水を生じます。水は土を得て以て相

生じますから、土中に水が出ます。始めは肝木を養うのに足りていますが、次第に各臓腑を潤すこととなります。ただ過ぎたるは良くなく、水勢が旺洋となれば堤岸を衝決します。水が土制(を受け)なければ、洪水の逆流となり、水が土の克を畏れなくなってしまいます。」少師言う「善く解りました」と。

陳士鐸言う：五行は水を得て潤い、水を失えば損し、況や資を取ること多くして分散少なきか。故に水は五行の窃む所にして、多からざるは可ならず(多い方がよい)。水を得ることの益有り、此に水を悟るべき(ポイントが) 有る。

胃土篇

少師問う「脾胃はみな土ですが、分けるところがありますか？」

岐伯答えて「脾は陰土ですが、胃は陽土です。陰土は火に逢って生じ、陽土は必ず君火に於いて生じます。(小高注：この考えは前節の陳士鐸の補注と異なっているように思われるが、後段に心包絡と君火は同類とする意見が見られる。) 君火とは心火です。」

少師問う「土は火より生じ、火来たりて土を生じます。両者相親しますが、胃土は三焦命門の相火に遭えば、これを辞し受けないのは何故ですか？」

岐伯答えて「相火と胃は相合しません。ですから相火はこれを得て燔しますが、君火はこれを得て楽しむに若かずです。」

少師問う「心包もまた相火ですが、何故に胃と親しむのですか？」

岐伯答えて「心包絡は君火に代わり指令する者です。ですから心包相火は君火と同じなのです。」

少師問う「心包が心の職を代わるのなら、胃土が心包の資を取るということは、心火の資を取ると同じこととなります。ただ二火が胃土を生じ益を受けるのに、二火が胃火を助けて禍いを受けるのは何故ですか？」

岐伯答えて「胃土が衰えれば火が生じるのを喜び、胃火が盛んになれば火の助けを悪みます。」

少師問う「これはまた何ですか？」

岐伯答えて「胃は陽土なので、弱が宜しく強は宜しくないのです。」

少師問う「何を以て強は宜しくないとするのか？」

岐伯答えて「胃は多気多血の腑ですから、動けば容易く火が動きますし、動けば燎原となり制することが困難になります。特に肺を煉すれば子(心)を殺すこととなりますし、心を焚き母(肝)を害することにもなります。火が盛んであることは水を枯らすことになり、火が沸騰することになれば、必ず林を焼き沢を竭きさせる虞れがあります。腎水を煉し肝木を焼くことも免れないでしょう。」

少師問う「どのように治するのですか？」

岐伯答えて「火が盛んならば済するのに水が必要ですが、水は外水では駄目です。外水は暫くは炎を止めることはできますが、非常の法と見なすべきで、必ず内水を以て大滋しなければなりません。内水とは腎水のことです。しかし火が盛んなとき滋腎の水では胃の火を瀉することはできません。火が旺んになれば滅するのは容易くなく、水が衰えれば驟にわか

に生き難くなります。」

少師問う「どうしたらよいですか。」

岐伯答えて「救焚の法は、先ず胃火を瀉し、後に（腎）水を以てこれを済うのです。」

少師問う「五臓六腑はみな胃気を藉りて生を為します。胃火を瀉すことが各臓腑に損となりませんか？水が生じなければ腎が先ず絶しないか恐れますがどうでしょうか。」

岐伯答えて「火が息まらなければ土は安んじません。先ず火を息め、後に水を済えば、甘霖が優うるおに渥い、土気は昇騰し、容易く万物が生じます。これが胃を瀉すことが胃を救うという所以です。是は火を瀉すことが土を瀉す事にほかならないのです。胃土には生機があり、どうして各臓腑に死法が有るのでしょうか？これが胃を救うことが腎を救い、併せて各臓腑を救うことにもなるという所以です。」

少師問う「胃気が安寧であっても、肝木が来て克することはどうしますか？」

岐伯答えて「肝が来たりて胃を克すというのも、肝木の燥きが原因です。木が燥けば肝気は平でなくなり、平でなければ木は鬱して伸びなくなり、胃土を克しますから、土気には自ずと生発の機が無くなります。ですから調胃の法は平肝を重しと為します。肝気が平らかで、補水を急と為せば、水は旺んとなり木が再び鬱することはなくなります。ただ水はそう容易くは旺んにならないので、須く補肺して金を旺んにして水を生じるようにし、水が木を養うようにします。金が旺んになれば木を制するので、木が土を克すこともなく、胃はその生発の性を得られるのです。」（小高注：補胃の主眼は、まず瀉火した後に平肝であり、さらに補肺を介した滋腎をすることにある。）

少師言う「善く解りました」と。

陳士鐸言う「胃土は水を養うを主とす。養水は助胃である。胃中に水が有れば胃火は沸かず、故に補腎は正に益胃の所以である。胃火の盛んなるは、腎水の衰えに依るを見るべし。腎水を補うは正に胃土を補うことなり。故に胃火は殺すべし、胃火は培うに宜し、素す可からざるなり。」

包絡火篇

少師問う「心包の火は心火に異ならないといわれますが、その生克も同じですか？」

岐伯答えて「言が同じなら同じですが、言が異なれば異なります。心火は胃を生じますが、心包の火は胃を生じるに止まりません。心火は肺を克しますが、心包の火は肺を克するに止まりません。」

少師問う「どういう事ですか？」

岐伯答えて「心包の火は胃を生じますが、また能く胃を死なせます。胃土が衰えても心包の火を得て土は生じます。胃火が盛んでも心包の火を得て土は敗れます。母である土が既に敗れば、子である肺金は何を能く生じるのでしょうか？」

少師問う「同一の火ならば、何故に生克が異なるのですか？」

岐伯答えて「心火は陽火です。その勢いは急ですから避けるべきです。心包の火は陰火ですから、その勢いは緩く親しむべきものです。ですから心火が肺を克するのは一時の刑ですが、心包が肺を克するのは実に久遠の害なのです。「刑」として生を害するものは勢い

が急ですが患いは大きくはありません。「恩」としながら生を害するものは勢いが緩いですが患いは徐々に深くなります。」

少師問う「如何に制すべきですか？」

岐伯答えて「心包は陰火ですから、心の陽気を窃んで自ずから養います。また必ず腎の陰氣を得てこれに通じます。心が腎を温めようとすれば、腎は心を潤そうとします。皆なまず心包と交わりこれを通し、腎水が少し衰えれば、心はまたその水気を分けますし、腎は心火の不足を供し、余恵を分けて心包を慰めます。心包が乾涸すれば、胃土を害することを怪しむなかれ、です。腎水の枯れたのを補えば、水が心に灌ぎ液と化すに足り、心包に注ぎ津と化すに足ります。これが胃を救っていないのに（実は）胃を救うことになる所以なのです。」

少師問う「胞絡の火は瀉すべきなのですか？」

岐伯答えて「胃土が旺ん過ぎるならば、必ず心包の火を瀉します。心包の火は暫くは瀉すべきなのですが、久しく瀉してはいけません。心包は心に逼近していますから、胞絡を瀉せば心火も寧かではいられません。」

少師問う「然らばどうすればよいのですか？」

岐天師答えて「肝経の木は胞絡の母です。肝を瀉せば心包絡の火もまた必ず衰えます。」

少師問う「肝はまた心の母でもありますから、肝を瀉せば心火も寒えるのではないですか？」

岐天師答えて「肝を瀉することが暫くならば、胞絡がその焰を損じて心も害するに至ることはありませんが、肝を瀉することが久しいと、心君もその炎を減じてしまい、至らなくても胞絡を害するようになりますが、胞絡を直接瀉するよりは猶勝っております。」

少師問う「誠に師の言の若くです。肝経の木を瀉するには急ぎ救うべきで、緩慢であってはいけません。その後の対処法を教えてください。」

岐伯答えて「水が旺んならば火は衰えます。既済の道です。どうやって腎水を補うかと共に、如何に火を瀉するかの方法を求めるべきでしょう。」

少師言う「善く解りました」と。

陳士鐸言う「胞絡の火は相火為り。相火は補するに宜しく瀉するに宜しからず。補すべきを瀉すれば必ず心包を害する。」

三焦火篇

少師問う「三焦は無形と言いますが、その火はどのようにして生じるのでしょうか？」

岐伯答えて「三焦を腑と称しますが、虚の腑です。腑でないのに腑と称するのは、寓を家と為すに随うものでしょう。木に遭って生じ、火に逢って旺んとなり、金に遭い土に遭うも相互に仇とせずを得るのです。各臓腑の気を窃んで自ずから旺んになります。」

少師問う「三焦は臓腑の気を耗じ、各臓腑を絶えさせるようであるのに、何を以て親しまれるのでしょうか？」

岐伯答えて「各臓腑の気は三焦がなければ上下の通達ができないのです。だから親しみ、気を以て益になるようにさせるのです。偷窃されることがあっても問いたすことはしな

いのです。」

少師問う「三焦が特に親しむのはどの臓腑でしょうか？」

岐伯答えて「最も親しいのは胆木です。胆と肝は表裏であり、肝胆は三焦の母、つまり三焦の家なのです。(自分の)家が無くても母家(つまり実家)に寄生できるということは、腑が無くても腑があるのと同じなのです。しかも三焦の性は動を喜び静を悪むので、母家にじっとしているより上下に流れている方を楽しみ、肝胆の宮が三焦の腑というわけにもいえないのです。」

少師問う「三焦は火でしょうから、火は水を畏れるはずなのに、何故に水と親しむのでしょうか？」

岐伯答えて「三焦の火は最も善く水を制します。水に親しんでいるわけでもないのに、喜ば水に入るので。そもそも水は火気に温められなければ寒水になってしまいますし、寒水では物を化することが(できません)から、腎中の水も三焦の火を得て生じますし、膀胱の水も三焦の火を得て化することができるのです。火と水が合して、実に既済の喜びがあるのです。但し火が熱すぎれば過剰に水を制することになり、水にとって益を得るより損を得ることになり、乾燥に苦しむことになってしまいます。」

少師問う「三焦は腑でないといいますが、三焦の火を瀉するにはどうしたらよいのですか？」

岐伯答えて「火を助けている臓腑を見てこれを瀉せば三焦を瀉す事になります。」

少師言う「善く解りました」と。

陳士鐸言う「三焦の火は臓腑に付随し、臓腑旺んならば三焦も旺ん、臓腑衰えれば三焦も衰える。故に三焦を助けるには各臓腑を助ければよく、三焦火を瀉するに臓腑に置くべきは問わざるか？則ち三焦の盛衰は全て□□□腑に在るなり。」

胆木篇

少師問う「胆は肝に寄し、木は必ず水から生じます。腎水は肝を生じますが、これは胆を生じることでもあります。他に胆を生じることがありますか？」

岐伯答えて「腎水が木を生じるのには、先ず肝を生じ、肝はその水を分けて胆を生じるのです。肝と胆は皆な腎の子であるのに、腎はどうして胆に於いて疏とおるのでしょうか？胆と肝は表裏とされますが、実は手足が相親しむように、彼此の分はないのです。ですから腎水が旺んならば肝胆も同じく旺んであり、腎水が衰えれば肝胆も同じく衰えるのです。ただ肝血が旺んだから胆汁も盈ち、肝血が衰えるから胆汁も衰えるのではないのです。」

少師問う「なるほど。では腎水が衰えていないのに胆気が病むのは何故ですか？」

岐伯答えて「胆の汁は蔵を主りますが、胆の気は泄を主りますから、通を喜び塞を喜びません。それでいて胆気は最も塞がりやすいのです。外寒に遭っても塞がりますし、内鬱でも塞がります。単に腎水を補っても胆木は舒のびやかになりません。木中の火が外泄できなければ、勢いとして必ず脾胃の土を克することになり、木土が交戦し、多く胆気は平らかでなくなり、火が肺を刑することを助けることもならず、必ず水を消耗して肝を虧損します。胆鬱により肝もまた鬱し、肝胆が交こもこも鬱するのでその鬱はますます甚しくなります。必

ず解鬱を先に行い、徒に腎水を補ってはいけません。」

少師問う「肝胆が同じく鬱しているときに、ただ胆木の塞のみを解するのですか？」

岐伯答えて「鬱が同じなら、^{どうし}烏て解鬱に異なることがあるでしょうか。胆が鬱すれば肝もまた鬱し、肝が舒かならば胆もまた舒かになる。胆を舒にした後に、これを済して補水すれば、水が木を萌えさせ榮え敷せるでしょう。木が水を得て調達すれば、肝血は絶えなくなるので、心の液を生ぜざるものがあるろうか？(必ず生じます)。此処より三焦は木氣を得て根と為し、包絡もまた胆氣を得て助と為し、十二経で胆の取決を受けないものは無くなり、何も匱乏を憂えるものは無くなるのです。」

少師言う「善く解りました」と。

陳士鐸言う「肝胆は同じで表裏と為す。肝盛んなれば胆も盛ん、肝衰えれば胆も衰える。胆を治するには肝を治するを先にする所以である。肝は鬱になりやすく、胆も同じであり、肝と俱に寧んじること殊とするか？故に胆を治するには必ず肝を治するべし。

膀胱水篇

少師問う「水は陰に属するのに、膀胱の水が陽に属するというのは何故ですか？」

岐伯答えて「膀胱の水は水中に火を蔵し、火がなければ水を化することができませんので、陽水と名づけられるのです。膀胱腑中に本来火はありません。心腎二臓の火が相通じて水と化することを恃んでのことなのです。水は蔵すべく始まりますが、また泄すべきなのです。火は陽に属しますし、膀胱は既に火氣に通じ、陰変じて陽となるのです。」

少師問う「膀胱は心腎の火と通じると言いますが、腎とは親しんでも心とは疏であります。心火は陽に属し、膀胱もまた陽に属しますから、陽と陽では親しまないのでは？」

岐伯答えて「膀胱と腎は表裏で、最も関係が密接ですから、腎は膀胱と親しみ、疏であることはできません。心は膀胱と相合しませんから、疏であつても不思議はないのです。ただ心と膀胱は合しないのですが、心と小腸は表裏ですし、実は小腸と膀胱は相通じています。心は小腸と合しますから、膀胱とも合せざるを得ないのです。このように心と膀胱は遠いように見えても実は近い関係なのです。」

少師問う「膀胱は心と親しいようですが、腎とは疏なのですか？」

岐伯答えて「膀胱は陽水ですから、陰火と通じることを喜んでも、陽火と通じるのは喜ばないのです。ですから心火とは親しむように見えても、必ずしも水を化さないのです。そして腎火（小高注:腎水か？）が心火と通ぜず、陰陽不交ならば、膀胱の陽火（小高注:陽水か？）は正に化することが難しいのです。」

少師問う「これはまたどうしてですか？」

岐伯答えて「心火は腎と下交しますが、心包三焦の火も斉しく来たりて相済し、胃（小高注:腎か？）を助け膀胱の水を化します。心と腎が交わらなければ、心包三焦の火も各々の心火（小高注:相火か？）を奉じて上炎しますので、どうして下降し腎と私通するでしょうか？下降しなければ、敢えて君（＝心）に代わって化水するのでしょうか？」

少師問う「君火は無為で、相火は有為であります。君火が下降せず、胞絡相火が正に君に代わって治を出すならば、どうして心火は相火と交わらず、また下降しないのですか？」

岐伯答えて「君臣は一徳にして天下治まります。君火が交わり相火が降るならば、膀胱は火を得て水を化します。君火が離れて相火が降るならば、膀胱は火を得て水も乾きましよう。君火は相火を恃んで行るとは雖も、また相火は必ず君火を藉りて治まるのです。腎は心火との交わりや胞絡の下降を得て、陰陽が合して一つの生となり、竟には腎を陰と為し心を陽と為して分けることはできないのです。」

少師問う「心腎の離合により、膀胱の得失はどうでしょうか？」

岐伯答えて「膀胱は寒えを可としますが、寒え過ぎはダメです。熱も可としますが、熱過ぎもダメです。寒え過ぎは遺となり、熱過ぎは閉となります。皆な心腎不交のせいですが、水火既済が重なる所以でもあります。」

少師言う「善く解りました」と。

陳士鐸言う「膀胱はもと水腑。而るに水中に火を蔵し、水無ければ交わらず、火無くても交わらない。故に心腎二蔵は膀胱腑に通じるが、膀胱が通じなければ、また何が交わるか。(膀胱は)心腎と交わり正に水火を蔵するのである。」

大腸金篇

少師問う「金は能く水を生じますが、大腸も金に属しますから能く水を生じるのですか？」

岐伯答えて「大腸は陽水ですので、水を生みませんが、水を藉りて相生じます。」

少師問う「水は何で能く金を生むのですか？」

岐伯答えて「水は金を生みませんが能く養います。養うは生むことでしょう。」

少師問う「人身に火は多いですが、どのように水を得て大腸を養うのでしょうか？」

岐伯答えて「大腸は水を離れては養うこともなく、水に苦しむことも少ないので、^{こいねが}糞う所は、脾土が金を生み、転じて精液を輸し、^{こいねが}庶うは乾燥の虞れ無くし、しかる後に腎水を以てこれを潤し、便ち濡沢を慶ぶことだけです。これは水土が俱に大腸の父母と為ることです。」

少師問う「土が金を生むと大腸がますます燥くのは何故ですか？」

岐伯答えて「土が柔ならば大腸は潤いますが、土が剛ならば更に甚だしく金を生むので、火が俱に生まれることを免れられないのです。金は土を喜んで火を畏れ、生（小高注:土生金）なのに、実は克（小高注:火刑金）すことになるので、どうして燥かないでいられるのでしょうか。」

少師問う「水は金を潤しますが、また能く金を^{とろ}蕩かすのは何故ですか？」

岐伯答えて「大腸は真水を得れば養われ、邪水を得ると蕩けます。邪正は両立しませんから勢い必ず相遭えば相争います。邪旺んならば生は敵する能わず、衝激澎湃として腸を傾け瀉します。故に大腸は水を防ぐに宜しいのです。水を防ぐとは外来の水を防ぐことで、内に存する水を防ぐことではありません。」

少師問う「人は水火無ければ生まれませんが、日々水を飲むのは何を以てこれを防いでいるのでしょうか？」

岐伯答えて「水を防ぐのは土を培うことと同じで、土が旺んで足りれば水を制すことができるし、土が旺んならば自ずと能く金を生じます。水を制し、邪水が侵す害を防げれば、

金を生じ真水が枯れることを愁えなくなり、自ずと火は静まり金は安んじ、伝導し変化することも可となります。」

少師問う「大腸に火はないのに、往々にして伝導し変化することができないのは何故ですか？」

岐伯答えて「大腸は火を悪みますが、また最も火を喜びます。火を悪むのは陽火を悪むことで、火を喜ぶとは陰火を喜ぶのです。陰火と言っても同じではなく、特に腎中の陰火を最も喜びます。火を喜ぶのは、火中に水があるのを喜ぶのです。」

少師問う「腎火は水中の火と雖も金を克するのに、何で喜ぶのですか？」

岐伯答えて「肺は子である腎の母です。気が通じない時は無く、肺と大腸は表裏で、腎気は肺を生じますから、大腸も生むこととなります。大腸は腎中の水火の気を得て、始めてその開闔を司ります。水火が大腸に入らなければ、開闔も権無く、何を以て伝導変化しましょうや？（できません）。」

少師言う「善く解りました」と。

陳士鐸言う「大腸に水火無くば、何を以て開合せん。開合既に難しければ、何を以て伝導変化せんや。大腸は水火を必須とすることを悟るべし。大腸に水火の真無くば、邪来たりてこれを犯さん。故に邪を防ぐには潤正を宜しとするのみ。」

小腸火篇

少師問う「小腸は火に属するのか水に属するのか、どちらでしょう？」

岐伯答えて「小腸は心と表裏であり、心と気を同じくしますから、火に属することは疑いありませんが、その体は水の路ですから、小腸もまた水に属すると言えます。」

少師問う「然らば小腸は水火の間にいて陰でも陽でもない腑と言えますか？」

岐伯答えて「小腸は陽に属し陰には属しません。ただ水の属を兼ねますので、水を能く導きます。水は火が無ければ化せませんが、小腸には火がありますから能く水を化します。水が火を化せなくても、火は水を化しますので、小腸が火に属することは明らかです。小腸の火は心君に代わって変化し、心はその火気を小腸と分けて、初めて水を導くことができ膀胱に滲入します。ですから心の火気が有っても、腎の水気が無ければ、心腎は交わらず、水火も合せず、水は膀胱にあわただ遠しく滲みることはできません。」

少師問う「どうしてでしょうか？」

岐伯答えて「膀胱は水腑です。火を得て化しますし、また必ず水を得て親しみます。小腸の火が膀胱と通じようとするれば、必ず腎中の真の水気を得て以て相引き、その後心腎が会し水火を済すれば、滲入も傳出も可能となります。」

少師問う「小腸は受盛の官と言われますが、既に水穀を容れて腸内に水がなければ、腎水を藉りて膀胱に通すのでしょうか？」

岐伯答えて「真水は存して泄れず、邪水は走って守りません。小腸は腎の真水を得ますから、能く水穀を化し清濁を分け、自然と水穀は俱に出ます。これが小腸が腎気を必ず資する所以です。」

少師言う「善く解りました」と。

陳士鐸言う「小腸の火は水有りてこれを済す。火が上焚せざれば、水が下行を始める。火が上焚せざる者は、水有りてこれを引き、水下降せざる者は、火有りてこれを昇らす。昇有り引有るは皆な既済の道なり。

命門真火篇

少師問う「命門は水火の中に居るといいますが、水に属するのですか火に属するのですか？」

岐伯答えて「命門は火です。無形にして気を有し、両腎の間に居り、能く水を生じ、また水を蔵するのです。」

少師問う「水を蔵し水を生じるとはどのような事ですか？」

岐伯答えて「火は水を蔵している。水がなければ火は沸き、水は火（の助け）がなければ生まれず、火が無ければ水は絶えてしまう。水と火は共に相生じ相蔵するのです。」

少師問う「命門の火は既に両腎と相親しんでいるが、各臓腑とはどうでしょうか？」

岐伯答えて「命門は十二経の主であり、腎が根として恃むこと^{たの}に止まらず、各臓腑も皆な相合するのです。」

少師問う「十二経には皆な火があるのに、何で命門の生を藉りるのですか？」

岐伯答えて「十二経の火は皆な後天の火です。後天の火は先天の火と違い化すことができないのです。十二経の火は命門先天の火を得て、生々息まないのです。しかる後に運輸運動変化して窮することが無いのは、十二経が皆な命門を仰望し根とする所以なのです。」

少師問う「命門の火気は甚だ微かであり、十二経が皆な来て資を取れば^{ことごと}く分け給しても匱乏の虞れが有るのではないですか？」

岐伯答えて「命門は水火中に居て水火相済しますから、これを取っても窮することはありません。」

少師問う「水火は腎において出るのではないのですか？」

岐伯答えて「命門水火は腎に完全に属してもいず、また完全に離れてもいません。ただ各経の水火は均しく後天に属し、独り腎中の水火のみが先天に属します。後天の火は容易く旺んになり、先天の火は容易く衰えます。ですから命門の火が微かならば、火を補うことが必須ですが、火を補うことは須く補腎ですから、必ず水火を兼ねて補うのです。正に命門の火は旺んであるべきですが旺ん過ぎてはいけません。火が旺ん過ぎることは水が衰えすぎる事なのです。水が衰えれば火を済えず、火の抑制がきかなくなり、必ず十二経を焚沸し、益を受けず損を受けることとなります。故に火を補うには水中において行い、水中で火を補えば命門と両腎に既済の歡びがあり、それが十二経に分布しますから、未済の害が起らないのです。」

少師問う「命門は人の生死に重要なかわりを持っていますが、『黄帝内経』にはどう記されているのですか？」

岐伯答えて「はっきりしません。「主」は明らかではないのですが、十二官の危について記し、この「主」は命門を指していると思われます。七節の傍らに「小心」がありますが、この小心もまた命門を指しています。ただ他の人はよく理解していません。」

少師問う「命門を主と為すことを前人はなんと云ってますか？」

岐伯答えて「広成子云う：窈窈冥冥、その中に神有り、恍恍惚惚、その中に氣有り。これもまた命門を指しています。誰が謂うのか、前人道う勿れ、命門は腎に居し、任督に通じ、更に丹田神室と相接し、丹田に神を存するは命門を温める所以にして、神室の氣を守るのは命門を養う所以なり、と。仙を修める道は命門を温養することだけです。命門が旺んならば十二経は皆な旺ん、命門が衰えれば十二経も皆な衰えます。命門が生じて氣も生じ、命門が絶すれば氣も絶します。」

少師言う「善く解りました」と。

陳士鐸言う「命門を十二経の主と為すことは『素問』で明言されておらず、難しいことであらう。だが明言していないということは、未だ言に顕していないということで、世の人が無知で悟っていないに過ぎない。天師の指示を経れば、命門は絶えても絶えないのだ。秦火未だ焚かざる前に、何故命門を修する者が少ないのかは、ひとえに『黄帝内经』をきちんと読んでいないからである。」

文献

(1) 胡国臣總主編：明清名医全書大成の内。柳長華主編：陳士鐸医学全書 pp.1-55、中国中医薬出版社、1999、北京

【謝辞】後藤学園中国室長 兵頭明先生には、字句解釈の上で大変お世話になった。ここに感謝の意を表す。